

# 「あーとくらぶ」と「にやりほっと」の取り組み

愛名やまゆり園 地域サービス課 井岡 陽一郎  
意思決定支援等地域生活推進プロジェクト 須藤 祐一

## 1. はじめに

愛名やまゆり園の目指す個別支援(意思決定支援)とは何か。中長期計画の重要プロジェクトには、利用者の希望やストレングス、ニーズに気づく「にやりほっと」の記載の重要性やそれらと「ヒアリングシート」を活用した「個別支援(個別支援計画)」の連動の必要性が掲げられている。また、これらの連動からくる「個別支援」と「本人アセスメント(本人を知ること)」の繰り返しから、「本人の望むくらし(地域生活移行)」の実現を目指すことも別途掲げられている。このことは、愛名やまゆり園が自分たちで目標として掲げ、自分たちで実現に向けて歩むと決めたことである。

一方で、昨今の障がい福祉の考え、県立入所施設のあり方等を考える中で様々な支援の方向性のキーワードが聞かれる。それらキーワードを聞くたびに支援現場では、不安や負担を感じ自分たちが本来行うことに対する混乱のようなものをきたしているような状況も散見される。しかし、実際に昨今聞かれるキーワードの内容を紐解くと、本質的な部分は概ね同じであり、発信の角度や論調が異なるだけのように感じられる。また、それらの内容と愛名やまゆり園の目指す個別支援(意思決定支援)も核となる考えは同じであると考えられる。これらのことを踏まえると、本来自分たちが掲げている愛名やまゆり園の目指す個別支援(意思決定支援)を丁寧に実践することが、昨今聞かれる支援の方向性のキーワードの内容実践にも繋がるということになる。そのため、様々なキーワードが聞かれるたびに新たな不安や負担を感じるのではなく、本来自分たちが行おうと掲げていることをいかにして具体的な実践として実績を紡いでいけるかが重要になる。

※「にやりほっと」とは、日々の支援や関わり等からの利用者の方の「好み」「楽しみ」「強み」等への気づきや様々な経験を通じた利用者の方の反応等を個人記録として記載したもの。愛名やまゆり園の目指す個別支援(意思決定支援)の軸の一つであり、全ての利用者の方の気づきの豊かさが求められる。

## 2. 意思決定支援等地域生活推進プロジェクトと意思決定支援推進担当職員

愛名やまゆり園の目指す個別支援(意思決定支援)を実践していく中心は現場の最前線の職員である。では、意思決定支援等地域生活推進プロジェクトは何を行うのか。意思決定支援推進担当職員は何を行うのか。

仮に「意思決定支援を行います。そのために、「にやりほっと」を書きます。ヒアリングシートを作ります。これらを活用します」…これらのことを支援現場の職員が伝えられたとしよう。行うこと、書くもの、作るもの、活用すること…これらのことは何となく話の流れで理解はできるように思う。では実際には「どのように書くのか?」「作るのか?」「活用するのか?」…。一つひとつのワードに関する実践の中身までの理解はどうか。このことの意味が非常に重要になる。そこで、この重要な中身の実践内容整理、実践検討等を行い支援現場での実践理解へと繋

げていくための交通整理を行うのが意思決定支援等地域生活推進プロジェクトの役割となる。

では、意思決定支援推進担当の役割は…。意思決定支援等地域生活推進プロジェクトでの交通整理としての一員となることに加え、整理した内容を実際の支援場面や個別カンファレンス等で現場職員に伝達したり、各個別ケースでのより実践的な交通整理を現場職員と一緒に行うような実践者のイメージである。決して、意思決定支援推進担当が何かを決めたり、導いたり、行わせるのではない。支援現場の持っている情報や、見立て、おもしろい等を一緒に整理し繋げていく補助的役割である。

### 3. 意思決定支援等地域生活推進プロジェクトとしての取り組み(一歩目)

ここまでの記載内容を含め、令和5年度の初回の意思決定支援等地域生活推進プロジェクトにてメンバー間で共有することから開始。大きな目標に向けた、当プロジェクトの意義や役割を共有したうえで歩み始める。また、共有することと併せて、愛名やまゆり園の目指す個別支援(意思決定支援)についての意見交換も始める。

意見交換を行う中、愛名やまゆり園の個別支援(意思決定支援)を実践に繋げていくために、まずは一つの軸でもある「にやりほっと」についての内容及び運用の整理が必要ということがわかり、それらの交通整理の作業に着手することとなる。

#### (1) にやりほっとの内容整理

改めて「にやりほっと」の記載目的を明確化し、それら目標の達成に繋げるための記載内容へと整理する。にやりほっとについては、中長期計画の重要プロジェクト内で利用者の希望やストレングス、ニーズに気づくためのものとして位置づけられている。そのため、これらを目標としてにやりほっとを記載蓄積するための内容整理を行った。具体的には、「日々の支援や関わり等から見られた新たな好み、楽しみ、強み等の可能性」や「新たな可能性を生活や支援に反映した際の本人の反応」をにやりほっととして蓄積するよう整理する。また、記載方法も目に見える場面を記録として残すことに加え、それらの場面から感じられる好み、楽しみ、強みや可能性等を主観的でも良いので残すこととする。

意思決定支援等地域生活推進プロジェクト内にて交通整理した内容を、別紙の周知文とともに支援現場へ周知し見直し後の運用を開始する。また、運用開始と併行し、「書く」前の重要なこととして本人の好みや楽しみ、強み等に「気づこう」「引き出そう」とする職員側の気持ちや姿勢が大切であることも現場職員に発信していく。

#### (2) にやりほっとの運用整理

にやりほっとの目的は、記載することではない。気づきを蓄積し、個別支援に活用、反映していくことが目的である。そのため、内容の整理と併行して記載蓄積後の活用方法についても整理を行うこととする。具体的な内容としては、にやりほっとを資料として用いて、新たな好みや楽しみ、強み等の共有とそれらを生活や支援に反映するためのアイデア出しを行う会議や議論の場を意図的に設定し運用することを進めていくこととする。このことについては、本来は愛名やまゆり園の全ての利用者の方が対象ではあるが、にやりほっとの記載内容の整理後まだ間もなく、内容も報告数も未熟な段階であることを理由に、まずはモデル的な実践とすることを試みる。しかし、あくまで全利用者へと展開していくためのモデルであることは繰り返しプロジェクト及び園内でも共有しながら実践の評価を続けていくこととする。

活用の整理に関しても、別紙のような周知文を作成し現場職員への発信を行う。



#### 4. にやりほっとの内容及び運用整理後の変化

にやりほっとの内容及び運用の整理を行い、現場職員に周知し半年程が経過。にやりほっとについての状況変化を成果中心に記載する。

##### (1) 豊かになった内容

下記はある日のにやりほっとの報告である。

テレビでコスモス映像が映ると「可愛いね。」と言っている。コスモスが好きなのか尋ねると「そうですね〜。」と言っていた。食べ物以外にも興味がある事を知り今後もコミュニケーションを取りながら様々な好きを知りたいと思いました。

日常生活の何気ない一コマを切り取った記録に思われる。しかし、その記載内容を見ると、その時の状況、利用者の好みの可能性、更にはそれらの気づきをこの先の生活や支援にどのように反映させられるかというような内容が記載されている。

にやりほっとは、職員一人の記載した記録である。しかし、にやりほっとには記載内容を多くの職員や関係者が共有し本人中心の議論を行うことで、様々な見立てやアイデアの話へと広がっていく役割がある。このような役割を、上記のような内容のにやりほっと記録は十分に担えるものとなっている。また、同様の気持ちや姿勢から由来する気づきを丁寧に記載したにやりほっとが多くなってきている。これらは、職員一人ひとりの気持ちや姿勢の変化による気づき、引き出しの増加の表れに思われる。

##### (2) 豊かになった報告数

記載内容の変化に加え、報告数の変化も見られる。別表は、昨年の同時期との報告数の比較である。数字でも分かるように、昨年度から10倍程の報告が見られている。この数字の変化は、ただ単に数が増えたという訳ではない。先ほど記載したように豊かな内容への変化を伴った数字の増加である。そのため、利用者の方によっては会議等の場面でにやりほっとを資料とした共有や生活、支援への反映についての議論が可能な状況が整い始めている。

しかし、まだまだ報告数が少ない利用者の方もいらっしゃる。この件については、課題として認識し、意思決定支援等地域生活推進プロジェクトで、状況を分析し、どのような方の報告数が少ないのかを抽出し、改善に向けた策を講じている途中である。この場では、詳細の内容記載は割愛することとする。

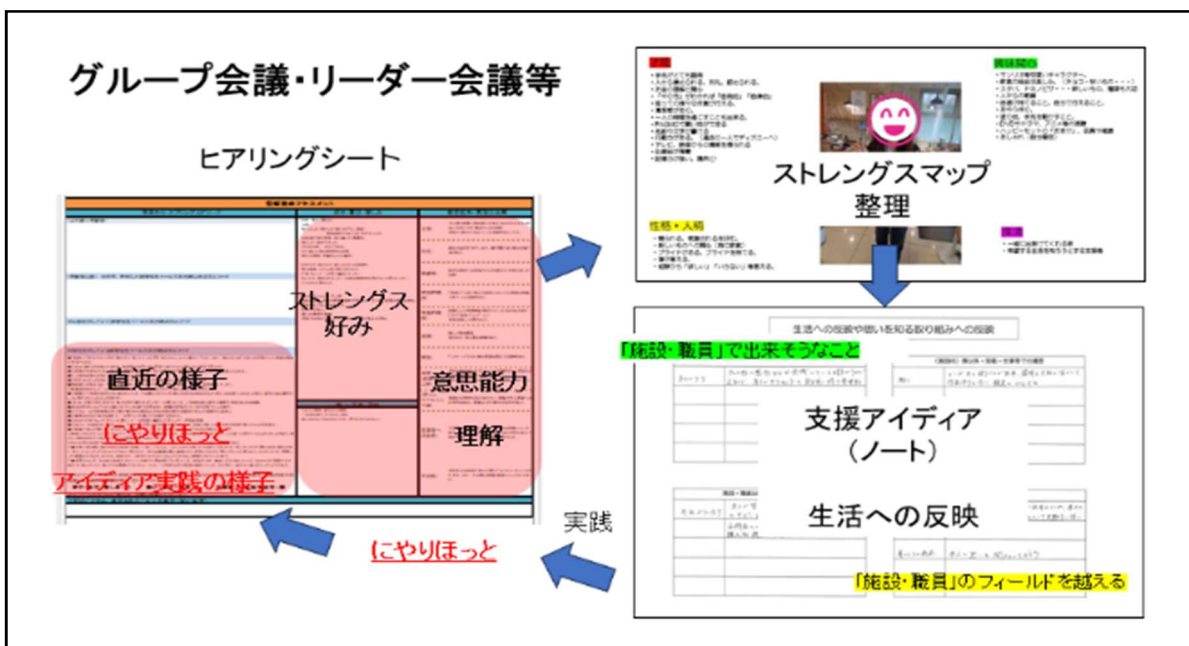
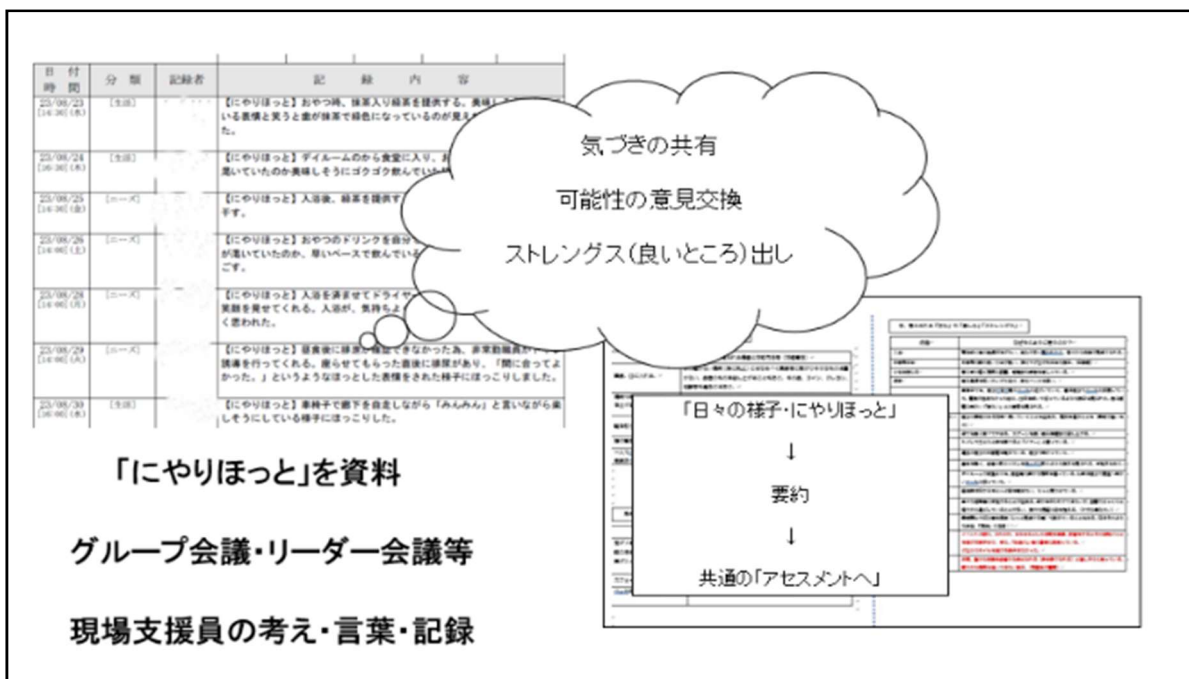
また冒頭でも述べた通り、この取り組みの対象は愛名やまゆり園の全ての利用者の方である。全ての利用者のにやりほっとが豊かになることを目標に継続した実践検討を意思決定支援等地域生活推進プロジェクトでは繰り返し行っている。

月	令和4年度		令和5年度	
	項目「全て」	文字「にやり」	項目「ニーズ」	文字「にやりほっと」
6月		69		476
7月		56		581
8月		57		500
9月		61		478
10月		47		557

### (3)豊かになった会話や会議

にやりほつとに記載のあるような気づき、可能性等が日々の支援中の何気ない会話の話題となる場面が見られている。例えば、日中活動での支援の場面で…「Aさんは手先が器用で様々なことができそう」「Bさんはお花の名前に詳しい」…このような会話が聞かれ、小さな関わりや支援の変化を生み出すこともある。例にあげたAさんは今まで行っていなかった受注作業にチャレンジ、Bさんは園外の散歩中にお花の名前の質問を試みたり…。小さな気づきから会話が生まれ、小さな変化へと繋がり連鎖が始まっている。

また、この話は支援中の会話だけの話ではない。まだまだモデル的な取り組みにはなるが、グループ会議等での議論の中でにやりほつとを資料とした共有や検討の時間も設けられ始めている。各職員の有している、利用者の方の情報。にやりほつとを通じた新たな気づきの情報。自分たちと出会う前の過去情報。それらの情報をグループ会議等で整理し、新たな可能性等の話し合いを繰り返し行っている。





#### (4)にやりほっとを愛名やまゆり園の文化に

個別の支援場面や、グループ会議等での会話や議論等を行うことに加え、園全体でもにやりほっとを共有する時間が生まれている。朝の連絡会では、前日に報告としてあがった各セクションのにやりほっとを共有し、その日一番印象に残ったものを選出し状況を確認するような時間が設けられている。一日の始まりが、前向きな気づきとなることも多く、少しずつにやりほっとが愛名の文化になり始めている。

### 5. にやりほっとを豊かにすることと個別支援(意思決定支援)が豊かになること

令和5年度初期から意思決定支援等地域生活推進プロジェクトで整理し運用を変化させていった「にやりほっとの取り組み」が少しずつ支援現場で芽吹き始めている。また、それらの芽を丁寧に育て、花を咲かせようとするための動きも始まっている。

この先も、全ての利用者のにやりほっとを豊かにしていくための取り組みを続けていくことは、愛名やまゆり園の目指す個別支援(意思決定支援)を豊かにしていくことにも繋がっていく。職員一人ひとりが「気づきたい」「引き出したい」と思う気持ちや姿勢を持ち、日々の関わりや支援での気づきを「活かしたい」と思い、蓄積し共有する。そして、共有したことを「本人の生活を豊かにしたい」と思い生活や支援へと紡いでいく。これらの良好なサイクルが一つでも多く生まれ動き続けることを愛名やまゆり園は目指し続けている。

### 6. にやりほっとを豊かにする場の一つ ～あ～とくらぶの紹介～

「あ～とくらぶ」とは、新型コロナウイルス感染症の拡大前は、「絵画クラブ」として、紙に絵を描くことを中心に、月に1回、プレイルームで開催していた。コロナ収束となった令和5年度より「あ～とくらぶ」と名前を変更して再スタートした。これらの活動の目的として、利用者さんの楽しみ、自己表現、ストレスの発散、軽減、コミュニケーションの場として・・・などを目的としている。

「あ～とくらぶ」と「絵画クラブ」の違いは、絵画クラブが、紙に描くことを中心としていたが、「あ～とくらぶ」は絵を使った物以外にも、音楽・園芸・ドラマ・フォト・造形・粘土・コラージュなど様々な種類がある。それに加えて、「アート」かどうかにかかわらず、本人の好きなこと、やってみたいことができる時間、場所としてをコンセプトとしてスタートした。

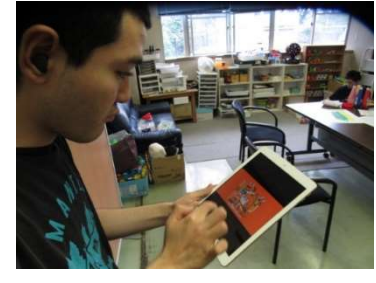
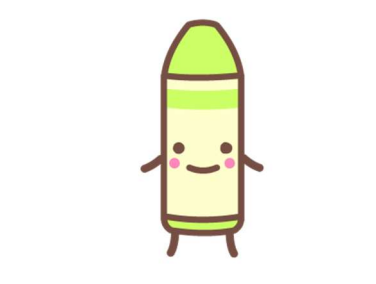
開催回数も月に2～4回、時間も13:30～16:00までと絵画クラブより拡大して活動できる機会を増やした。オープンしている時間であれば、いつでも自由に参加してもらっている。毎回10名前後の方が参加されている。

実際の取り組み内容としては、以下のことに取り組んでいる。

- ・自由に絵を描く
- ・スクイグル（なぐり描き）
- ・塗り絵
- ・貼り絵(コラージュ含む)
- ・紙ちぎり
- ・楽器を鳴らす
- ・音楽を聴く
- ・ビーズ通し
- ・習字
- ・ipadでアプリを選んで、動画を観たり、ゲームなど。



また、「あーとくらぶ」の様子は、以下の写真から、その場所の雰囲気や利用者さんの様子、どのような作品を創っているかを掲載した。



「あーとくらぶ」で活動の幅を広げることにより、絵画クラブの時に比べて、参人数が増え、これまで来ていなかった方も参加していただけるようになった。

寮職員や総務課職員も見学して、一緒に参加して楽しんでいる場面もみられるようになった。会場には、音楽を流したり、アロマを焚いたり和やかなで落ち着いた雰囲気の活動場面を演出している。

この活動を楽しみにしている方、毎回参加される方もいて、少しずつではあるが「あーとくらぶ」を意識してもらえるようになったと思われる。

創作活動等を通して、新しい発見があったり、できること、好きなことが増えたりする機会の一つになればよいと思う。

時間や場所も、既存のものにとらわれず、アート活動を通じて、地域の方や、ボランティアの方などと交流ができるきっかけになればと思う。

## 7. おわりに ～意思決定支援と職員の気持ち

令和5年10月25日に意思決定支援等地域生活推進プロジェクト主催の意思決定支援の研修を行った。ここでは、研修内容は割愛するが研修後に行ったアンケートの内容を一部抜粋引用したうえで、所感を添えておわりの文章としたい。

### (1)利用者の方々の支援等を通じて「楽しい」「嬉しい」と感じることは何ですか。

(抜粋)

- ・支援提供により利用者の方が笑顔になった時。
- ・新たな一面を見られた時。
- ・利用者の方に「楽しい」「嬉しい」と感じてもらった時。
- ・新しい発見。今まで出来ないと思っていたことが実はできた…等。
- ・笑顔が多いと支援者としての仕事も良いと感じる。
- ・利用者の意外な面を見られた時は嬉しくなる。
- ・長く愛名にいる職員に利用者の過去の様子を聞いて今と比べたりするのも楽しい。
- ・利用者の方の行動(言葉以外も)の意味や思いがわかった時。
- ・職員と話等を行っている際に一緒に笑ったり、関わり(会話)等を行いながら支援を行えている時。
- ・変化や反応等が見られた時。
- ・新たな「好きなこと」が見つかった時。
- ・生活や余暇等を通じて「こんなことができるんだ」「意思表示が見られた」と感じられた場面は嬉しい気持ちになる。
- ・好きと思われることを喜んで嬉しそうに行っていて下さっている時。
- ・利用者の方からの要望が聞かれ、それらの要望に対応した際に満足して頂いたのかお礼を伝えて下さったときは嬉しい。
- ・ご本人との関わりを通じて笑顔が見られたり、関わりを求めて下さったとき。

### (2)アンケート返答と意思決定支援

アンケートの返答内容のようなことを志して、障がいを抱える方を支える仕事を選択し今に至る人は少なくないと思う。これらは職員自身が相手の思いを知ろうとしたり、新たな気づきを得たいと思ったり、本人の笑顔や喜びの姿を見たいと思ったりして実践に至った結果とし



ての場面であることが多いと思う。そして、これらのことは、ここまで記載してきた愛名やまゆり園の目指す個別支援(意思決定支援)の実践と何ら変わらぬことでもある。

しかし一方で、意思決定支援と聞くと支援現場では「不安」「負担」等の比較的ネガティブな言葉が聞かれることも少なくない。これら実態とイメージの大きな差異はなぜ生じてしまうのか。このことの緩和が取り組みの推進や広がりには欠かすことができない。そして、それらの緩和の一つのヒントが「実践による経験と実感」だと考えられる。愛名やまゆり園の目指す個別支援(意思決定支援)を丁寧に実践した結果が、職員一人ひとりの「嬉しい」「楽しい」の実感に繋がっていく。この積み重ねが、取り組みの自発的な推進や広がりに繋がっていくと考えられる。

第三者や外圧的に与えられた意思決定支援から職員が本来行いたかった支援のための意思決定支援へ。これらの実感を支援現場が実践を通じて感じられると良い。そして、それには支援現場での実際の動きに尽きる…。このように感じる。また、それらの芽生えも少しずつ見られている。支援現場で取り組んだことが、結果として職員一人ひとりの「楽しい」「嬉しい」の実感へと繋がっていく。これらを生み出すことを繰り返すことが大切に思う。

意思決定支援は逆風ではなく追い風である。自分たちが掲げ、目指していた風景に近づけるための追い風である。様々なことがある昨今。そんな今だからこそ、本来目指していた目的地へしっかりと歩いていくために意思決定支援等地域生活推進プロジェクトとしても心地良い風に変えていく一翼を担えたらと思う。